左京区
桃栗坂上ル

SAKYŌKU MOMOKURI-ZAKA AGARU

瀧羽麻子
Asako TAKIWA

新連載
第1回
彼女はどちらかといえばおとなしい子でもあった。
ともとの板っ気ない性格で、自分の意見や存在を主張したいという欲もほとんどなく、相手の相手には人見知りしてしまうようだった。見知りしてしまおうだって。喋る必要があるときだけ口を開き、それで十分に思は足りた。ひとりっ子だから声を出さない。

私が子のことを頭の真ん中に置いて、不都合がないように世話を焼きていた。娘が考えついたことを声に出すよりも前に、母親が先回りしてそれを察し、動き出している。たまる放心した。

だからといって、むやみに甘やかされていたわけでもない。娘がおがままに育ってしまわないように、という点についても、母親は細心の注意を払っていたからだ。

母性自体は三人姉妹の次女で、しかも両親は共働きで忙しく、よくも悪くも手をかけられず、ということがなしかった。当時はもう少し手をかければよかったと感じてはまなかった。だから母はおがままに育てられていた。

だからこそ母は慎重に向きあった。母親にはそういう生真面目なところがあっならない。ふだんは穏やかでひかえめなので、謙らないところは決して譲らない。そんな母の性質を、実は娘もしっかりと受け継いでいる。

娘は少し違っていた。娘への愛情を、惜しみなく表現した。しぶしぶ愛らしいと言っては抱きしめ、すべての肌に感動してほずくをした。当時の彼女にとっては、まるうそう大きいなくてからのお話だけれども、たんに少し違っていた。

娘とスキンシップをはかれるのが休日に限られていた分、喜びをおさえられなかったのだろう。父親は損害保険会社の営業マンとして忙しく働いていた。朝は子どもが起きる前に家を出て、帰ってくるのは夜遅く、平日は
左京区桃栗坂上ル

Copyright. SHOGAKUKAN All rights reserved.
この子、なかなか人気者なのだよ。母親が誇らしい気分だっただけだった。彼女自身、今も昔も、自分のことを美人だと思っているだけだろう。

しかし、別れが近いうち、北海道から奈良へ引越すとき、前日に最後の挨拶が行われた。彼女は珍しく大泣きした。母親の行き届いたしつけによって、聞きわけよく礼儀正しくふるまっていた日頃の様子とは、まるで別人だった。身を震わせて泣きわめく彼女に気づかず、もったいなく、なんとなく親しみやすい雰囲気がある。彼女は客観的に自己評価したようだと、奈良では辛い思いをしていた。

会社が用意してくれた住みは、四階建てのアパート。
現在は急いで最寄りの公園を探す必要はない。南の三階の部屋だった。

今回は急いで最寄りの公園を探す必要はない。南の三階の部屋だった。

母親が手を休めて立ちあがり、網戸の向こうを見やりました。 |

母親が手を休めて立ちあがり、網戸の向こうを見やりました。 |

子どもたちが集まり出したので、十時頃になると、窓の外が騒がしくなってきました。

子どもたちが集まり出したので、十時頃になると、窓の外が騒がしくなってきました。

公園に子どもたちが集まり出しました。 |

公園に子どもたちが集まり出しました。 |

略号から公車を探す。

略号から公車を探す。

田舎の手次に、手次に手次に。 |

田舎の手次に、手次に手次に。 |

ベランダは暑かった。熱を帯びた金属の手すりを両手でつかみ、額間から公車を見下ろす。

ベランダは暑かった。熱を帯びた金属の手すりを両手でつかみ、額間から公車を見下ろす。

手すりにはところ

手すりにはところ
どこまでも歩き、さらさらしていた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわっていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れられてきていている、彼女と同じ年頃の子だけではなく、幼稚園児や小学生もいた。
公園はぎわしていた。親に連れされて
「名前は？」
「見慣れない新参者の顔をじろじろ見ながら、女の子がたずねた。彼女はおそるおそる答えた。」

「何歳？」
「女のは、かた
「四歳」
「うちも」

「こちらは璃子。かなは果菜。と書く。しかし璃子にとっ
ても果菜にとっても、そんなことはどうでもよかった。

よいよ看板娘の本領を発揮した。
普通的、幼児はまず片言の単語を発し、それから徐々に
単純だが意味は通る文句を投げかけて、常連客を喜
ばせた。

璃子は明らかに強い関与を感じた。この名前は、おそらく
持ち前の社交性は、公園で同じ年齢の子どもたちと遊
ぶときにも役立った。果菜もみんなの人気者だった。男
の子にも女の子にも好かれた。友達に不自由していなか
かったはずの果菜が、なぜ物静かで目立たない璃子と特別
に親しくなったのか、周りからは不思議がられていたふ
しささえあった。けれどもじめて出会ったときから、ふた

「うちは、かた
「四歳」
「うちも」

「こちらは璃子。かなは果菜。と書く。しかし璃子にとっ
ても果菜にとっても、そんなことはどうでもよかった。

あるのは確か。誰かと知りあったときに共通点を探
うとする。地元が同じだとか、出身大学が同じだとか、
それが会話の糸口になったりする。でも四歳児は、そ
ういうままだっちょしいことはしない。直感に導かれるま
ま友達を作る。幸せ、その前はだいたいあたる。

それにしてでも、璃子と果菜はどこかと対照的だった。
たどり一致していた。おまごことである。

“なりこうどん”を広げたとたんに、なんの変哲もない地面がカラフルな床に変わった。その上に小さなおうちが現れる。

ふたりで遊ぶときは、果菜がお母さんで璃子が娘、見っしりが定番だった。たまに役割を交替してみても、どうしようらず弟が増える。大所帯になるときもあった。そ

者で世話好きな果菜は、少なくなっても公園に集まっている

同じ年の子どもたちのうちでは最もお母さんから

がてふたりは、公園以外の場所でもシートを広げる

"がってふたりは、公園以外の場所でもシートを広げる

しとみんなに思われていた。実際のところ、たった四

歳にして、将来はいかにして肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にそうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらいたい。ままごと熱中しているときは特

にこうだった。将来はいかに肝玉を母さんになりそうな風

格を模倣してもらう。
左京区桃栗坂上ル

ようになった。璃子のアパートのベランダや、果菜の店とその裏手に建つ自宅との間に位置する中庭や、そ
の日の気分でどこにするかを選んだ。

公園の芝生はふかふかで座り心地がいいし、陽あたり
のいいベランダも落ち着くのだけれど、中でも璃子が気
に入っていたのは、果菜のうちの中庭だった。あまり頻
繁におじゃまするご迷惑ではありませんが、母親に釘をさ
れた彼女そのやさしくて、食事中も落ち着いて食べる
いだなんて、絶対に言えない。

中庭で遊んでいると小鳥や陽えちるなどからとも
なく飛び立つのも、璃子にはうれしかった。生きもの
が好きだというのも、璃子にはうれしかった。生きもの
虫も、動物離れした果菜や小虫をかわいらしく
食べているものも多かった。春にはいちごがかわいら
しい実をつけ、夏には重なりあった葉の間からすらうれ
いが顔をのぞかせ、秋には立派な柿がお金につぶまるわ
って、庭で収穫した果菜や店先に並んでいる野菜を、璃子ち
や、よかったらこれ持ってって、と果菜の母親がお土
産にもたせてくれることもあった。苦手なビーマンにと
んで子供をだらだらとお礼を言うわけではないけれど、璃子
はいつも身構えた。できるだけ感謝を客に言うのは、璃
子の役目だった。りこちゃんは強いなぁ、と果菜は嘆息
の上に侵人してきた虫たちをそっと追いはらうのは、璃
子の役目だった。りこちゃんは強いなぁ、と果菜は嘆息
の上に侵人してきた虫たちをそっと追いはらうのは、璃
子の役目だった。りこちゃんは強いなぁ、と果菜は嘆息
の上に侵人してきた虫たちをそっと追いはらうのは、璃
子の役目だった。りこちゃんは強いなぁ、と果菜は嘆息
の上に侵人してきた虫たちをそっと追いはらうのは、璃
子の役目だった。りこちゃんは強いなぁ、と果菜は嘆息
の上に侵人してきた虫たちをそっと追いはらうのは、璃
果菜の家族だけに限られている。おもちゃの食器や人形も鶏が遊んでいる。母親がおやつや簡単な昼食を運んでくれた。父親がトレイのつけて声をかけた。中庭は店元の通り道なので、子どもたちが遊んでいた。

「お兄ちゃんもよせたろうか？」

「あら、なんでそんなことまで聞くの？　瑞子は面食らった。兄は果菜よりももっと背が高く、さらにやせっぽちの妹とは違ってそなれしない横幅があった。背負ったランドセルも小さく見えた。五年前生が六年生、下手する中学生といっても通用しそうだった。格に加える、顔つきもあまり年齢に合っていなかった。含まれているというのでもなく、たとえならなら思慮深い老人のような目をしているでもなく、それは些細な部分。

瑞子の母親は夫にそのたずまきを説明しようとして、妹の言葉に強まった。

瑞子は母親に夫のことをたずまきを説明しようとした。妹はそのことを知るべきではないと投げやりに言った。

「ええよ」

「それはそうか。まったく。ところで折れる汚れ、ちょっと果菜の母親が不満そうだ。向かいあっている果菜と果菜の間に座ると、奇が沖ます。

「お友だちを呼んで遊んでみる。あんたも食べるべきだ。」

「いや、食事はいい。向かいあって遊んでいる果菜と果菜の間に座ると、奇が進まなかった。」

「ええよ」

「そうか。ところで、今度は果菜の母親や果菜の父親が不満そうだ。向かいあっている果菜と果菜の間に座ると、奇が進まなかった。」

「いや、たんと考えあがれ。皮もむかんと食べられるよ。」

三人の真中には、果菜がぶどうの盛られた鉢を置いてくれた。

「ちょっとお兄ちゃん、ミミちゃんごまんtotて」
果葉は店の裏のようせに言い、口調を変えた。

「あお母さん、おなかへった。おやつ、よくだい。」

「なあ、お兄ちゃんはお父さんな。」

「 jdbc、果葉が宣言した。」

「で、りおちゃんがお母さん。」

「ええ。」

璃子はにわかに緊張した。

「じゃあ、お兄ちゃんがお父さんでうちがお母さんっていうのはおかしいやろ。」

「でも、お兄ちゃんがお父さんでうちがお母さんっていうのはおかしいやろ。」

「そうだ。」

「お兄ちゃん、ちょっとお友さんでしょう。」

「うるおう。」

「だいて好きやねんもん。」

「ええ。」

璃子に負けて口をとがらせている。こうしていると、年相応に子どもっぽく見えている。ふたりの肩のかたもがそっくりなことに、璃子はなんだか感心した。

「すまん。」

兄弟璃子のほうへ向き直り、まじめな顔で謝った。
うん、と璃子は首を振った。いつのまにか肩の力が抜けていた。
「ひこちゃん、はよ食べな、ほんまになくなるよ。」
「ま、果葉が真剣な顔で忠告した。差し出された錫から、璃子はまるいぶどうの粒をひとつまんで。ほほほるる。
「お、ふくよかな甘みと香りが口いっぱいに広がった。」「おしい！」「やん？」「お前さ、おれの気持も和んだ。」
「兄がうれしそうに微笑んだ。幸福そうなんで顔を見て。
璃子の気持ちも和んだ。
その日から、兄はたまにレジャーシートの家に寄って、いくようになった。基本的に大奥やつまりであったが、
シートの上にする間は妹たちのこっそ遊びにつきあって、
すぐに従った。果葉があれこれ注文をこっそこそ遊びにつきあって
に梨の盛られた皿に手を伸ばすと璃子は言った。「お父さん、ゆっくり食べてや。」
「お父さん、ううすい手を振って見送った。」
「お母さん、うわざってくら」と璃子たちの数倍の速さでおやつを食べ終える。「会社に行っている」と制服やバサを持って、
璃子は彼のことを、遊んでいる間は「お父さん、そ
うでないときは果葉にならって「お兄ちゃん」と呼ぶよ。
璃子は彼のことを、遊びている間は「お父さん、そ
うでないときは果葉にならって「お兄ちゃん」と呼ぶよ。
璃子は彼のことを、遊びている間は「お父さん、そ
うでないときは果葉にならって「お兄ちゃん」と呼ぶよ。
璃子は彼のことを、遊びている間は「お父さん、そ
うでないときは果葉にならって「お兄ちゃん」と呼ぶよ。
璃子は彼のことを、遊びている間は「お父さん、そ
うでないときは果葉にならって「お兄ちゃん」と呼ぶよ。
果菜がたずねた。

「果菜、食べ終わったら、お皿持ってきても。」

「うん。」

「璃子はうなずいた。旅行に必要なのは、従姉の結婚式に出席することだった。特に親しい間柄でもなかったの

で、さほど感慨はわいてこなかったものの、ウェディング

ドレスには圧倒された。豪華な料理とケーキに。

「ええ、「おめえさんかあ」

果菜はうっとりと言った。

「うち、アキラくんのおめえさんがなりたい。」

アキラくんは公園によく来る、色が黒くて足の速い男

の子だった。乱暴なところがあったって、木の枝を振り回し

たり毛虫を投げつけてきたりするので、璃子は好きにな

れない。「シートの上で、そもそもごめん毛虫を見ると。果

菜はぎゃあぎゃあ騒いでいたのに、それとこれとは話が
相手はよく食べるひとがいる、とぶかかった。父は食の
細いほうで、璃子は食いしん坊だなあ、お父さんがよりた
くさん食べるんじゃないか、とよくからかってくる。父の
caro、と鋭い声が頭上から聞こえたのは、そのときだ
った。ぼぼぼと荒々しい羽音が続いた。璃子は家を出る前にすませ
いった。カア、カア、カア、と威嚇した。鋭い
くのいった皿を検分している。恐怖のあまり、悲鳴も出なかった。
からすはぐぐぐぐぐぐくで、まただました。璃子は目をつぶり、手を顔を
かばった。カア、カア、カア、からすが狂ったように
鳴きはじめた。

璃子はびっくりして目を開けた。手の指の隙間から、
心配そうにこちらを見下ろしているお兄ちゃんが見えた。
「追払っただったから、もう平気やで」
「片手でランドセルをぶらさげたお兄ちゃんは、心なし
か息をはずませ、
「それ何かれ、つちゃんうそうやな」
と皿をそぎこんだ。それから璃子のほうに振り返り、
日をまるくした。
「どないしたん、りこちゃん？」「
璃子は返事をかわりに首を振った。安心したら、涙が
出てきたのだ。
お兄ちゃんは遠慮がちに背中をなでてくれた。果菜が
泣いたときもしそうやってなまっていったので手つ
きは安定していて、本物のお父さんのようだった。璃子
のほうは、手の甲で目をこしこしとこすりながから、「お
母さん」ではなく「りこちゃん」と呼ばれたのはじめ
てだ、と関係のないことを考えていた。
そこでどう考え回路がつながって、いきなりそんな
ことを言い出そうと思っていたのか、璃子にはいまだにわか
らない。けれども、どうしても今回伝えな
ければいけない、となかか確信したのだ。
だから意
を決し、口を開いた。
「お兄ちゃん」
「なに？どうしたん？」
「だしぬけに顔を上げた璃子に、
お兄ちゃんはちょっと
たじろいだように応じた。
気迫が伝わったのかしれない
だ。」
「わたし、お兄ちゃんのおよせさんになる」

璃子は言った。
ご利用規約

「WEBきらら」でご覧いただく小説・エッセイ等読み物（以下、本サービス）に関する編集著作権を含む一切の権利は、小学館（以下、当社）または著作権を有する第三者にあり、本サービスに関しては当社が著作権者を代表して管理しています。当社に無断で転載・複写・蓄積・転送などすることはできません。

本サービスはAdobe Acrobat Reader（フリーソフト）を使用することによって、あらゆるシステム上で表示が可能となります。ただし、あくまで本サイト上でおいて作品を楽しんでいただくため、印刷・ダウンロードなどの動作には規制がかけられています。たとえばこのような動作が可能であったとしても、当社に無断で転載・複写・配布・売買などすることはできません。

本サービスをご利用されるお客様には、以上の利用規約を承諾及び遵守していただきます。

Copyright. SHOGAKUKAN All rights reserved.